



学生の声

世の中で、より快適に働くために 2007年度入学(会計専門職専攻) 松井 淑子

弁護士9年目にして、関学のアカウンティング・スクールに入学しました。なぜアカウンティング・スクール、なぜ大学院、なぜ関学なのか。

働き始めるとすぐに実感しました。世の中はお金で動いている、このお金の動きに大きな影響を与えるのは税であり、会計だ！会計・税務の知識の必要性を痛感しました。税理士さんらに教えてもらいつつ、本を読みました。しかし、所詮、泥縄の勉強です。体系的・集中的に学ばない限り、到底、使い物にはなりません。そのままあっという間に7年が経ってしまいました。8年目、このままでいいのかと自問自答したとき、アカウンティング・スクールの存在を知りました。大学院。働きながら単位を取れるか？不安でした。

もっとも、専門学校とは異なり、実務家教員もいる、研究者もいる、そんな方々から教わる機会は大学院しかない。そして関学なら、平日夜間クラスが梅田にある。もうここしかない、今しかないと思い、気づいたら入学願書を出していました。実際、入学してみると確かに時間のやりくりは大変です。しかし、入学半年の勉強でも確実に仕事に役立つ場面があります。企業の会計処理のあり方、法人税の知識などを思い浮かべ、議論の助けになります。会計は法律と同様、道具として役に立ちます。入学は辛い高地トレーニングです。しかし下界に降りたとき、より快適に働くことが出来ます。「迷ったら困難な道を選べ。」



不惑、桑年そして知命へ 2007年度入学(会計専門職専攻) 加藤 順弘

近視眼的で無責任な施策によって将来世代の利益が損なわれているのではないかと、「不惑ⁱ」の歳に抱いた疑問は、「桑年ⁱⁱ」になっても解決されないまま横たわっているだけでした。意思決定の適否が自治体格差を左右する時代が訪れているにもかかわらず、いまだ、なすべきことを模索している自分に悩んでいた矢先、あるコンサルタントの方との運命的な出会いによって、そして石原先生の熱意に触れたことによって、導かれるようにアカウンティングスクールの門を叩きました。

入学後は、年齢的な不安を抱えつつも、これまでと違った視点で自治体を捉えたいと思い、会計系、経済・経営系の科目を中心に履修しています。学期が進むにつれ、真っ白な知識の点が線に、その線が面へと広がっていく体験を重ねながら、学ぶ喜びを実感しています。知は快感、学問の本質はきっとここにある、これがアカウンティングスクールの魅力となっているのかも知れません。

仕事に学習にと、時間に追われながら「板に付かない」学生生活を送っている私ですが、入学時の想いが色褪せることはありません。「NPM」、「公会計改革」などの言葉を鍵に、自治体を取り巻く環境が大きく変化してきている現在、自治体を変えるための理論の中心をなすのが、財政学と会計学の融合にあるのではないかと考えています。貪るように「知」を求めながら、アカウンティングスクール修了時に迎える年齢である「知命ⁱⁱⁱ」、そのとき私は天命を知りたいと思っています。



ⁱ不惑(ふわく): 40歳 論語: 40にして惑わずから。

ⁱⁱ桑年(そうねん): 48歳 桑という字の異字体「桑」が、四つの十と八に分けられ合わせて48であることから。

ⁱⁱⁱ知命(ちめい): 50歳 論語: 50にして天命を知るから。